

馬場孤蝶

「文学界」のこと

「文学界」のこと

雑誌『文学界』に集まっていた五六人の者の思想なり
作物なりがどういふものであつたか、それらの者共の
為^{ひととなり}人がどういふものであつたかというよふなことに就
いては島崎藤村君の『春』という小説が殆んどそれを書
き尽くしている。その小説の中の青木というのが北村透
谷であり、岸本というのが島崎藤村君であり、市川とい
うのが平田禿木君であり、菅というのが戸川秋骨君であ
り、岡見兄弟というのが星野天知君と同夕影君であり、

福富というのが上田敏君であり、栗田というのが大野洒竹であり、足立というのが馬場孤蝶であるという風で、中に書いてある事実も先ず全部実際あつたことだと云つて宜かろうと思われる。そうして見ると、『文学界』のことを僕が茲こゝで話すのは全く蛇足である訳になるのだが、然し、『春』の方は小説であるのだから、幾らか臆げなところもあるかも知れないと思うので、茲には事実として話して見ようと思う。

ところで、『春』は御承知の通り印象的に書かれたものであるので、あの中に出て来る個人々々の行為、思想

というようなものに就いては、『春』の中で書かれなかつたことは大分あるのであつて、それを話せば当時の文学者の謂わば裏面的生活に対して好奇心を持つ人々のおなぐさみ丈けには確かになることだと思われるけれども、これは茲ではやらない。何故それをやらないかというのと、実際の事実というものは、様々な人の利害に關係を有つて居るものであるから、それからしてまた、個人の私的生活というものは何等か已むを得ざる理由あるにあらざれば他人から公にすべきものではないのであるから、それを芸術にでもするのでない限りは、この場合

に於て公にすべきものでないと僕は考えるからであるのだ。

『文学界』の第一号（二十六年一月刊行）を僕が見たのは高知市に於てであつた。

僕は二十四年の暮に両親を東京へ遺して置いて僕一人高知市の共立学校という英語専門の学校へ教師に行つて、二十五年の夏休みに東京へ歸つて、それから九月の末位に高知へ行つたのであるが、その夏休みの間は眼病に罹っていたので、島崎君にも戸川君にもそう度々は会わなかつたように思う。島崎君が巖本善治氏の『女学雑

誌』の寄稿家でその時あったことは知っていたが、別に島崎君の交友達に就いて聞いたことはなかった。

ところで、『文学界』第一号は島崎君から僕の手許へ郵送されたか、それとも島崎君自身の手から受取ったかどちらであったか今確かには覚えていない。

二十六年の一月の末か二月の初めであったか、その時日の記憶は今確かでないが、教場に出ていると小使が古藤庵無声という名刺を持って来て、こういう人が会いに来たと僕に言った。僕は新聞社の人でも来たことかと思つて暫時待っていて貰いたいと小使に言った。で、それ

から少し経って教場から出て来ようとしていると、小使がまたやって来て、お客様は甚くお急ぎひどのようでございますというのだ。そこで、一体どんな容子なのかと小使に訊くと、どうも旅をなすってお出でになったお方のようでございますというのだ。その瞬間に僕の心には、余程親しい人が訪ねて来て呉れたのではなからうか、思いもかけぬ人が来たのではなからうか、というような予覚が生じた。今思えばその時何となく島崎君の名が僕の心の中に微かに閃めいたように思うのであるが、それは今の記憶なので当あてにならない。で、大急ぎで小使部屋へ行

って見ると、旅装束の島崎君が居た。僕は予期したことが当たったような感じと意外なことが起ったという感じとが妙に雑り合まじった心持で島崎君を迎えた。が、島崎君に其処で会ったのは僕にとって是非常に嬉しかった。高知は僕の故郷である、然し乍ら幼年の時其処を去った僕に取っては、高知の言葉を殆んど忘れてしまったような僕に取っては、高知は全く旅先であつた。その遠国の旅先で親しい友に会つたのであるから僕は非常に嬉しかった。僕はその時甥を東京から連れて行つていたので、それにいいつけて島崎君を僕の家へ案内させて、それから

僕自身は学校の仕事をしまつてから家へ歸つて島崎君と
ゆつくり話をした。『文学界』のことや『春』の中にあ
る岸本捨吉君の恋愛の話をきいたのはその時であつた。
二十三年以後の島崎君は、非常に沈黙な、非常に嚴格な
人に見えた。それは島崎君の自己改造に努力せられた時
代であつた。女のことなどを話し合つたことのそれ迄一
度もなかつた島崎君の口から、恋愛の話を聞くのは僕に
取つては甚くひどく意外であつた。僕はその時は既に性欲上の
或る経験は有していたのであつたが、島崎君の話したよ
うな——即ち『春』の中の岸本君のやつたような——恋

愛をば十分に理解することができなかつた。同情はあつたが、所謂共鳴はなかつた。島崎君は僕の家には精々四五日位しか居なかつた。或るみぞれ霽の降る日に高知の湾から船に乗って帰ってしまった。それから少し後になつて我々の親友某君が、某君自身の恋愛に対して島崎君の同情が足りないという不満を島崎君に訴えた。すると島崎君は「それは誰しも有もつ感情なのだ。現に高知の馬場の所へ訪ねて行つたときにも先方は非常に款待して呉れて心持がよかつたが、ただ自分の恋愛に対しては馬場の同情や理解が足りないように思われたので、ただそれだけ

が自分には不足であった。誰でも恋愛に熱中しているときには、他人の同情なり理解なりが足りないように思うものだ」と答えたそうである。が、実際のところ僕は島崎君の恋愛に就いての話には面喰めんくらわされたような気持であつた。異ことなつた世界を近々と見せられたのであるが、僕はその世界の人であつたこともなく、又その世界へ突入しようという気もなかつたので、僕の同情は熱中した恋人を慰めるに足りるものでは決してなかつたのだ。僕が島崎君の心持を理解し得る点まで近付き得たのは、それより後のことである。そうして見ると、島崎君は文学

者として僕の先輩であると共に、そういう人情の点に於ても確に僕の先輩であるのだ。

高知の鏡川の岸にあった僕の家で、早い春の夜、島崎君は物静かなしかし沈痛な声で、島崎君自身の文学を本気にやりだした心持や旅に出た考や自身の人生観などを詳しく話した。

『春』を見ると、次のような青木——北村透谷——の文章が引いてある。

「極めて拙劣せつれつなる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣な

る生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘ままに睨にらましめて、真摯なる靈劍を空際に撃つ雄士は、人間が感謝を払わずして恩沢を蒙る神の如し。天下斯かくの如き英雄あり、為す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて他界に遷うつるもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざる所なり。」

これが北村透谷のみならず島崎君始め其他の文学界同人の考を最も雄弁に説明していると思う。

高知で島崎君から聞いた話や、其の他の諸君から聞いた話を総合して見ると、『文学界』の起つた過程はおおよそ大凡次のような風であつたらしい。巖本善治氏が出して居られた『女学雑誌』が次第に耶蘇教に縁故のある若い文学者の作物を発表する壇場になつて来たのは、明治二十五年頃である。ところで、その年の秋頃からして『女学雑誌』に文芸附録というようなものを附けることにして、そこへ『女学雑誌』関係の若い文学者に力を尽させようという話が出来た。が、巖本氏は宗教家であるのだから、文学者とは——殊に其の『文学界』同人になつたような

人々とは——大分道德観も違うのであったし、殊にそういう文学者の連中には、もう既に耶蘇教に対する反対的態度を表明し出していた連中さえあった位であったのだから、そこで、双方の為に『女学雑誌』とは一向関係のない雑誌を出す方がよかろうということになって、^{いよいよ}愈々二十六年の一月から『文学界』を出すことになったのであった、ということだ。金は星野天知君が出し、編輯は星野夕影君がやることになった。で、その時の執筆者は、北村透谷、星野天知、古藤庵無声（島崎藤村）、平田秃木というような後來『文学界』の幹部になった人々

に、戸川残花氏が謂わば特別寄稿家のような位置に加わっていたのであったように記憶する。その時分、島崎君の書いたものは各行十七字になっている戯曲若しくは抒情詩が主なもので、その外に芭蕉の俳文脈を大分取入れた散文が大分あった。高知で島崎君に会ったときに、島崎君は「十七字にすると漢語が自由に使えるから、こういう形を始めたのだ」と僕に説明して呉れたことのあるのを記憶する。

北村透谷は、『文学界』に加わらないうちから可成り作をしていたようである。『蓬萊曲』という戯曲のよう

なものが既に単行本になって出ていたと思う。僕が透谷を見た時分には、最^もう透谷の体が病的になり始めていた時分なのだ、何時か島崎君が云ったことがある。それはそうなのであろう、如何にも神経質らしい落着のない人のように思われたのだ。年齢の割には世間的知識の狭い、考の偏った人のように思われた。妙に角の立った人のような気がしたのであった。が、心の弱い人とは見えなかった。野卑だというようなところは決してない人であつた。が、惜しいことに耶蘇教がそれ程ぬけ切つていなかった。けれども、そういう風に稍^や一本調子に見え

たところが或る仕事の——或る思想上の仕事の——開拓者としては必要な資格であるかも知れないのだ。

平田秃木君は、その時分はまだ二十一歳位であつたろうと思うのだが、平田君は却々なかなか成熟していった。芸術上の技巧に対する鑑賞力の精到なる人であり、一体に興味の豊富な人であるのは勿論、人情に対する知識及び考察力が年齢の割には余程多かつた。今日の平田君は如何にもひかえ控目な人になつてしまつて、今は殆んど隠遁的生活を送っているような有様である。けれども、二十六七年の頃の平田君は筆に於ても口に於ても却々の論客であり、

警句家であつた。平田君の紅葉露伴両氏の作物に対する批評などは却々気の利いた粹いきな文章であつて、紅葉が書を寄せて平田君に或る作物の批評を頼んで来たことがある。『春』を見ると、「市川という男は西洋料理を食つて反吐へどを吐いたようだ——こういう有難い批評をある大家から頂戴したといつて市川は反りかえつて笑つて……」と書いてあるのだが、僕が誰からか聞いた話では、紅葉が『文学界』の連中は西洋料理と日本料理を一緒に食つて反吐を吐いたようなものだと言つたというのである。成程これは當つて居る批評であろう。ところで

平田君の所謂反吐は、西洋料理と日本料理が可成り融合していたのであるが、島崎君等始め僕等に至る迄もの反吐はその二つの料理が生そのままに出ていた趣が確かにあったらうと思う。

『文学界』の創立者達のことには就いては先ずそれ丈けにして置いて、その人々の志という様なものを説明する事を試みよう。

『文学界』の創立者等は、兎に角孰いずれかの耶蘇教の教会に籍を置いた人々である、その当時の耶蘇教なるものは可成り新知識の進歩主義の人々を集めていた。が、しか

し、そういう人々の中心思想は、東西の古い^{ふる}道德から何程も脱出しているのではなかった。『文学界』の創立者等の志は、そういう古い道德から自分等の思想を解放しようというのに在った。『文学界』の創立者等の間には「繩墨^{じょうぼく}を脱する」という言葉が行われた。即ち古い^き羈絆^{はん}を脱する、即ち習俗を脱するという意味だと解して宜からう。

前に引用した透谷の文章の中からも窺^{うかが}い得られるが如く、『文学界』の創立者等の志は所謂凡人の思想行為、即ち凡人の生活の尊重に在った。凡人の存在の意義、凡

人の尊嚴を主張するに在った。

『文学界』創立者等の当時文界に対する態度は——其当時の思想界に対する態度は、その当時文界の權威を成していたところの硯友社派及び民友社派の文学に対する反抗の態度であつた。謂わば物質主義に対する精神主義の反抗であつた。洗煉に対する野性の反抗であつた。文界の紳士に対する文界の書生の反抗であつたのだ。言葉を換えて云えば、理知主義に対する感情主義の反抗、客觀主義に対する主觀主義の反抗であつたのだ。

『文学界』の同人は自分等の失恋のことを平気で書い

た。尤もその点では僕と戸川君とが一番罪が深かったかも知れないが、他の諸君もその点で全然無罪だとは言えなからう。ところで、二十八年頃だと思ふのだが、川上眉山が、尾崎紅葉が「文学界の連中は恋の失敗のことを殆んど誇りがに書いて居るのだが、あれは並の人ならば隠すのが本当であるのに、どうしてああいう風に露骨に書くのであろう。あの連中の心持がどうも解らない」と云っているということに僕に話したことがある。『文学界』の連中が露骨に自分等の失恋を告白したのは、前に言った通りの平凡生活の尊重、客観主義に対する主観主

義の反抗、洗煉に対する野性の反抗、というような所に根拠を有していたのだと思う。「英雄畢竟馬前の塵ひつきようである。つわもの共の夢の跡は夏草である。羅馬ローマの城壁は跡なく崩れてしまった。英雄の事業に何の永遠はるかがあるろう。恋を索もとめ天地の美を探る凡人の心の方が、隻はるかに永遠はるかであり、意義がある」と、島崎君が高知で僕に話したことがあるように思う。

『文学界』の同人等は当時の思想界の現状、当時の文界の現状にはあきたらなかつた。で、彼等はその現状から脱却しようとした事は前に言った通りであるが、其脱却

しようと思つた当人が矢張り彼等自身の裡に旧い多くのものを有つて居つた。なおその上に、残念なる哉、彼等は自然主義の開拓者等の如き良い師表を有つていなかった。『ハムレット』と『若きエルテルのわずらい』とではそう遠くまで行けないことは知れ切つている。彼等は人生にロオマンスを索めた。即ち彼等の向つた方向は間違つてはいなかつた。が、到着点を確かに睨んでいたのではなかつた。『文学界』の創立者等及び『文学界』に可成り關係を有つていた人々の中で、出発点から到着点まで少しも疲れずに来た人が二人ある。それは島崎藤村

君と田山花袋君である。

ところで、一口に云えば、『文学界』の同人ということになるのであるが、勿論個人々に就いて言うとは色々異ったところがあるのは勿論のことである。けれども、茲に極大ごくまかな類別を示してみたいと思う。明治四十二年頃かと思うのだが、島崎君の浅草新片町の家で、「馬場君とは生れた階級が違うので、色々相違があるように思う。馬場君等は上流の階級から出、僕等は下流の階級から出たのでそこに色々面白い相違があると思う」というようなことを島崎君が僕に言ったように覚えている。

この大類別法に従つてみると、一寸と面白いことを発見する。即ち北村透谷、戸川秋骨の両君へ更に僕を加え、それを一方に立たせ、島崎藤村君と平田禿木君とを他方に立たせて見るというと、一方の人々は考が抽象的であり、趣味も粗大であり、万事大擱みな人々であるが、他方の両君はそれとはまるで反対で、思想も緻密であり、趣味もこまかく、万事に精到している。前者は謂わば予言者肌であるが、後者は何処までも芸術家肌である。北村透谷は行きつまって斃たおれたのであるが、性格に於て似寄つた多くを有つていたと云わるる島崎藤村君は、非常

な努力によつて行くべき道を自ら開拓した。これは、この両君の性情の差にも基くことであろうが、上に言つたような類別もその原因を為していないわけはなからうと思われる。

そこで、その次に来る問題は、『文学界』の創立者等の為し遂げたところのものがどういふ影響を、その後の思想界及び文学に及ぼしたかという問題であるのだが、これは最も手取早くいふとよく分らないというより外はない。『文学界』の廃刊したのは明治三十年の十二月であるのだが、雑誌はそれ以前よりもその以後に於て弘くひろ

読まれたと信ずべき理由がある。そうして見ると、すくな 尠くともその時分の文界には多少の影響を与えたには違ひなからうが、その代り『文学界』の連中それ自身が、明治二十七八年頃の思想界及び文界から様々の影響をうけたことは事実であるし、また彼等の出現はその時分の青年の間に勃興しかけていた思想の大勢に推されたものを見るのが至当である。即ち彼等の出現は「時の徴」しるしであつたのだ。で、その後から起つた思想界並びに文界の様々の運動に『文学界』の出現それ自体がどれ程の貢献をしたのであるか、これを定めることは全く不可能であ

る。が、『文学界』同人中の個人々々になると、それは大分異った話になって来ると思う。吾々は北村透谷、島崎藤村、田山花袋の三君の如きその人の思想、文体技巧等がその後に来れる若き人々の芸術に様々な直接的な影響を与えた人々に敬意を表すべきであろうと思う。言い度^たいことは尽きないがこの話は先ずこの辺で打切る。そこで、断って置くが、この話の中で故人には大抵「君」という敬称をつけなかった。これはその人々を軽蔑した訳では決してない。ただこういう場合の先例に従ったままである。

それから『文学界』同人のことに就いては、島崎藤村君の『春』が最も良い説明書である。『文学界』同人のことを知ろうと思われる人々は『春』を精読せられんことを希望する。

日本文学電子図書館

「文学界」のこと

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館